農業気象技術対策資料

農作物の少雨に対する技術資料

令和８年２月６日（金）

愛媛県農林水産部農業振興局農産園芸課

本県では、令和７年 11 月以降、降水量が平年を大きく下回るなど少雨傾向が続いている。

冬季の少雨は、作物の生育が緩慢なことから、直ちには被害が顕在化しにくい一方で、土壌水分の減少や根域環境の悪化等を通じて、春作物の播種・定植期における初期生育不良や活着不良につながるおそれがある。

また、２月上旬は、春以降の生育に影響する土壌水分や根系形成の条件を整える時期であることから、今後の降雨や気象の見通しを踏まえつつ、土壌水分の保持と用水の有効利用を基本とした管理を行うことが重要である。

１　作　物

【麦類】

・今後、降雨、高温に転じると、麦や雑草の生育が急激に進む恐れがあるため、追肥、麦踏み、土寄せ、除草剤散布等の作業は、降雨のタイミングを見計らい、時期を逸さないよう注意する。

２ 果 樹

【かんきつ】

・冬季の著しい土壌水分不足は、耐寒性が低下するほか、春先の発芽不良や樹勢低下の要因となる場合がある。

・土壌が乾燥している園地では、必要に応じてかん水を行い、乾燥を緩和する。

・敷草・敷わら、保水性資材等を活用し、根域の水分環境の安定化を図る。

【落葉果樹】

・キウイフルーツなど浅根性の樹種では、乾燥の影響を受けやすいため、根域の土壌水分管理に留意する。

・せん定後は樹体の回復を促すため、生育状況を見ながら必要に応じてかん水を行う。

３　野 菜

【冬春野菜】

・定植直後は十分なかん水を行い、活着を最優先する。

・乾燥が続く場合は、少量のかん水を回数多く行い、根の伸長を促す。

・肥料吸収が低下しやすいため、生育状況を確認しながら適宜追肥を行う。

・マルチ被覆を行っていない場合は適切に除草を行い土壌からの蒸発を抑制する。

【春作野菜】

・用水が確保できない場合は、無理な播種・定植を避け、降雨を待つ。

・可能な品目ではポット育苗を活用し、ほ場での水管理負担を軽減する。

・マルチ被覆により、地温確保と水分保持を同時に図る。

４　花 き

・冬季の少雨は土壌水分不足を招き、これにより春先の生育停滞や品質低下、開花遅れ、落花等が懸念されるため、適切なかん水に努める。

・一時的な多量かん水は根傷みの原因となるため、少量・多回数を基本とする。

・少雨が続くと地下水位の低下や用水路の水量減少が懸念される。日ごろから水位や水量を確認し、水の確保に努める。

・施設栽培では、日中のハウス内温度が上昇しやすいため、換気を徹底し、適温を維持する。また、乾燥・高温条件下では、ハダニやスリップスなどが発生しやすい環境となるため、早期発見・早期対策に努める。